

# 上小地区賛助会 会報 143号

令和4年11月18日 発行  
(公財)長野県長寿社会開発センター上小支部

## 2022 賛助会上小支部活動発表会開催

令和4年11月17日(木)上田文化会館展示室、大ホールにおいて賛助会上小支部活動発表会が開催されました。展示室では各グループとシニア大生の作品展示、ステージの午前の部では賛助会の各グループのステージ発表、午後の部ではアトラクション、講演会がありました。



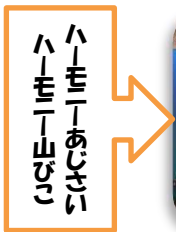
<松原克彦支部長挨拶>



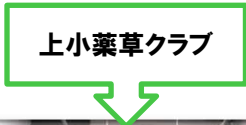
<ステージ発表>



<小林郁朗賛助会会長>



<作品展示>



88 チャレンジの会





春陽会

楽しい和紙絵



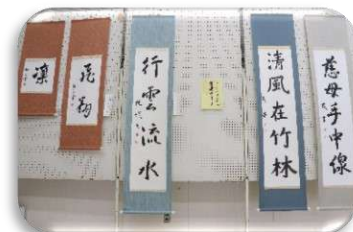
木彫ふきのとう



<ガチャガチャバンド>



<講演会 両角文秋 先生>



シニア大学 2 学年

## 賛助会グループ活動紹介

【柳 歩】 グループ長 舞沢 徳嘉

### 川柳作句で元気を維持

「柳歩」会は平成18年川柳教室卒業生が結成、丸16年続いている川柳愛好者のグループです。会員は多い時は20人を超えている時もありましたが、現在は10人で活動をしています。老齢化が進み平均年齢は傘寿に近いですが皆元気です。

月一回の定例会は、宿題の2題、席題の1題を各2句 計6句を提出し持ち回りの選者が選考の後、披講致します。笑いあり、涙あり、拍手ありの約2時間の楽しい時間を過ごしています。目指すのは大木俊秀さんの言うズバリ切る、ほろり泣かせる、チクリ刺す、ニンマリ笑う、ポンと膝打つそんな川柳の句ですがなかなか難しいものが有ります。

地域の公共温泉施設「ささらの湯」へ約1ヶ月の作品展示や、大型スーパーでの他の賛助会グループとの共同展示会なども積極的に行っています。

コロナ前は宿泊を伴う吟行句会や親睦マレットゴルフなども行っていましたが現在は自粛しています。

コロナ禍の下ですが万全を期して、今後も楽しい愉快的な川柳会を継続していきたいと思っています。また、新人会員も大歓迎ですので参加お待ちしております。

【詩吟 同好研究会】 グループ長 上條 巖

さて今回も、身近な詩文を紹介させていただきたいと思います。

作者不詳

解説： 太田道灌は室町末期の武将である。主家の命を受けて江戸に城を築いたのは



道灌26才のことであった。この詩は、そのころ道灌が歌の道に精進するきっかけとなった物語である。少女から無言のうちに差し出された八重山吹の意味が分からず、帰って学問に詳しい家臣から「後拾遺和歌集」の中務卿 兼明親王の和歌

「七重八重 花は 咲けども 山吹の みの 一つだに なきぞ 悲しき」

という古歌の心をとって、蓑がないと断ったのだと聞かされた。

道灌はこれを恥、学問に励み、当時きっての歌人武将と評されるまでになった。

語釈：

- \* 太田道灌=1,432~1,486年頃。室町時代の武将。
- \* 狐鞍=従者を連れずに1人で馬に乗って行くこと。
- \* 茅茨=かやぶきの家

通釈：

太田道灌が共も連れずにただ一騎で鷹狩に出かけ、にわか雨にあい、茅葺のあばら家に立ち寄り、蓑を借りようとした。少女が出てきて無言のまま、傍らの八重山吹の花を折って捧げた。少女は終始無言であった。まして、山吹の花は何も語りはしない。道灌の心は、城に帰ってから乱れて落ち着かず、もつれた糸のようだった。

オオタドウカン ミノ カズニタイ 作者不詳

太田道灌蓑を借るの図に題す

英雄(エトウ) 少女(シヨウ) 少女(シヨウ) 孤鞍(コアン) 心緒(シンシヨ) 言(イ) 為(タメ) 雨(アメ) 衝(ツ) 乱(ミダ) 花(ハ) 花(ハ) 茅茨(ボウシ) 糸(イト) 語(カ) 一枝(イツシ) 如(コトシ)



## シニア大学OB紹介

シニア大学OB 竹内 栄 様

2020年10月にシニア大学OBの竹内栄様が俳句・川柳集「ひぐらし」を出版されました。今回はその中から竹内様のご了解の上、いくつかの傑作をご紹介します。なお竹内様の恩師であります田中純子先生の解説も添えさせて頂きました。

〈田中先生の解説〉俳句

ある日「一羽だけ残っている白鳥がいるんですよ。どうしたのか、怪我でもしたのか。心配で可哀そうで、」と竹内さん。彼はとてもやさしい方です。特に白鳥に対しては心を籠めて寄り添い、白鳥を慈しんでいます。着水した白鳥に「漲る力」を発見し、首を背中に乗せている白鳥にそのなごやかな姿を安堵して見つめている竹内さん。しかし怪我をしている白鳥、一羽だけ雨に濡れている白鳥もいる。さりげない表現であるが、白鳥の帰来を待ち望んでの長い季節の移ろいの中で、育まれた愛情の深さがどの句にもしっとりと伝わってきます。そして怪我をした白鳥は元気になったのでしょうか。「千切れるほど」の措辞に、寂しさの中での励ましと、無事なる旅であってほしいとの祈りも伝わってきます。

(田中先生は竹内さんを密かに白鳥詩人と呼んでいるそうです。)

着水に力漲る小白鳥  
小白鳥首を背に乗せ微睡(マドロ)みぬ  
背の羽をそよがせてをり小白鳥  
一羽のみ残る白鳥雨頻(シキ)り  
怪我を負ひ飛べぬ白鳥羽繕ひ  
旅立てぬ白鳥一羽波まかせ  
鳥帰る千切れるほどに羽激(ゲ)きて

メタボです太っ腹とは違います  
明日会おう一升瓶に蓋をする  
これだけの薬仕分ける胃に感謝  
忘れたいことを忘れぬ記憶力  
慎重に狙い定めてズボンはく



〈田中先生の解説〉川柳

川柳は俳句とは違い季語がありません。そして、そこには滑稽や皮肉が必要とされます。独学とは思えない素晴らしさです。思わず笑ってしまいました。

編集後記

今回の賛助会活動発表会は、コロナの影響で開催が危ぶまれておりましたが無事に開催されホッとしております。グループの皆様の活動の様子を垣間見ては、どうかコロナが収まりますように願っておりました。日々努力する事の大切さを賛助会の皆様に教えて頂きました。ありがとうございました。そしてお疲れ様でした。事務局